

『征清戦袍余滴』(四)

——山岡金蔵中尉の日清戦争従軍日誌——

井ヶ田 良 治
山 岡 高 志

はしがき

I 緒 言

II 明治二十七年日誌

十月二十一日

(以上 七十五号)

十月二十二日～十二月四日

(以上 七十六号)

十二月五日～明治二十八年一月十七日 (以上 七十七号)

III 明治二十八年日誌

一月十八日～三月七日

(以上 本号)

三月七日より

(以下 次号)

敵將校の死亡せし者の服中より次の如き書付あり

十九日海城攻撃、二十日奪地、二十一日犒軍 廿二日修

文 廿三日招兵、廿四に何・・・

敵の考へも面白き予定にこそ

此日元坂二等軍曹以下若干の補充兵着す、父上よりの十

二月八日出手紙達す

酒保は日々着荷す、十二月廿五日の追送なり

十九日

午前十一時海城孔子廟に於て招魂祭を施行す、桂閣下の

祭文あり、各隊は順次ニ参拝せり

各隊より国旗ふきぬき等の献納あり、当中隊よりは桜の

造り花、蓮花と大緑門なりし、二見浦は雪にて岩を作り

あり、第六中隊日本兵士が宋慶を倒し銃剣を向ふ処、第

八中隊水瓶にて石とろうろう、砲兵隊大なるむかで、第

八中隊支那兵のごくもん、第六聯の第二中隊其他造り物沢

(承前 明治二十八年日誌)

一月十八日

此日も戦争ありたれど小戦なり、第七聯隊と第十九聯隊
にて昨日の敵を追撃せり、

昨日の死傷敵は五十、味方は四十内死者五名のよし

山あり、諸紙聞記者が筆記し居る、酒・牛豚羊は沢山献上、酒保及追送品は日々海城縣へ来る、二月中は当地を去る事なし

第一軍司令官は本日岫巖へ還る

三月中は当地を去る事なし、諸君に宜敷

一月十九日午後二時記し了る

一月二十四日 海城縣發

一月十九日書状差出し海城北方の戦況を述べたり

一月十九日午後四時以後

高刊方向には敵なし、

牛莊街道には昨夜清兵四百牛莊に入れり

教軍場斥候報告

長虎台高地及西土城子の高地には旗二三疏樹てたる敵兵数十人を見る

遼陽街道に出せし騎兵大隊長報告

敵の警戒線は長虎台より西煙台南方高地に亘れり、其兵力は長虎台附近に歩兵約二百人、騎兵五六十、前柳河子南方高地に歩兵四五十騎兵若干あり、西煙台附近には歩兵五六百を見る

第六旅団よりの通報

前面の敵は少数の如く其大部は既に東北に退却せしもの

の如し、

去る十七日營口を發し昨日帰城の土人の言に、十七日常、依兩將軍は使を遣し宋慶を迎へたれども應せざりし、宋は蓋州を失ひたるにより頂戴(官名)を奪れたり、宋は最早戦の意なく、馬三元外数名の高官は憤慨して宋慶に服せず、宋は田庄台に退き馬三元は石橋子にありと云

旗一本五十人(歩兵)其長を哨長と云、旗二本を官と云、我中隊長の如し

本日は招魂祭の爲め日本酒三升の分配を受けたり

一月二十日

遼陽方向の敵異なる事なし

騎兵大隊は明日營口及旗堡及馬富屯遼陽方向の敵情を搜索す

牛莊方向に出でし騎兵斥候報告 歩騎連合の敵は西部三台子にあり、其数多からざる者の如し

石田少佐報告

本日北高刊より来る土人の言に、石橋子附近には六七百の清兵あり、昨夜清兵悉く田庄台を去れり

昨日營口を發し本日高刊より来りたりと云土人の言に宋慶は大房□にありと、後家湯房に五六百、石橋子附近にも亦五六百の清兵ありと

当地の差後局は第一軍管民政事務所と改正

一月二十一日

本日午後四時頃情況、敵の大部隊は円瓢子方向より大富屯方向に前進し来る、又西土城子より白匭子に敵兵六七百進入し其一部は砂河沿に入れり、同午後三時二十五分発波羅堡、小原少佐報告

円瓢子方向より前進せし敵は約二千人、其大部分は腰屯にあり、他は五六百人宛大富屯并小富屯へ進入せり、多分本夜同村に宿泊するならん、又白匭子に來りし敵は多く砂河沿に進入せり、又此の敵は砲四五門を所持する如く見へたり、

諸隊は明日何時にても出發し得る如く準備すへしと命令あり、

騎兵は明早朝第六旅団前哨の左右翼に位置し遼陽及牛莊街道を搜索し、頭引堡及大富屯附近の敵の運動を監視するにあり(海城と腰屯、波羅堡 大富屯、白匭子、円瓢子、二台子の略図略)

一月二十二日

午前一時十分命令あり、曰く

今午前六時二十分迄に北門外に整列すべしと、是れ即ち前日来の敵の來り攻むるなりと知られたり、六

時は当地は未だ夜が明けざる一時半以上なり

此日敵は午前十字頃より徐々に來り十一時には戰面凡そ三里にて一望山なき廣野を一系列の散兵にて雪中を進み来る、其運動は去る十七日と異なる事なし、已に十七日に敗れたりしにも懲りざる吉林兵は今度は先日敗れ口の付きたる二台子方向に主力を向けたるが如し

我軍は勉めて近づけ一挙に之を殺さんとの計劃なりしが、第六旅団の方面へは早くより戰声甚だしく凡そ千四五百米突にて兩軍相持して戰ひたり

大迫少將は藤甲山より之を見、佐藤大佐に第十八聯隊の第三大隊と第六聯隊の第一大隊とを引率せしめ、牛莊街道近傍の河の堤に潜ましめ塚本大佐には二台子の西なる蘓家堡及團山子にありて第六聯隊の第二大隊を指揮せられたり(前哨なる故に)

余はそれ故に佐藤大佐の指揮下にありて川堤にひそみたりしが、丁度敵の砲兵と我砲兵の射撃する中間にてありき、随分危険の事多かりしと雖、僅に一二名の傷者にて他は密集の儘にてひそみ居れり、敵は我等の潜伏しあるを知らず、唯一連の散兵を以て凡そ二千米突位より我兵を見ると見ざるに闕らず唯無茶に射撃しつつ進むなり、丁度敵なき練兵場にて散兵が二千米突より射撃して進む

に似たり、敵は連発銃あり、単発銃あり、擡銃あり、此銃の如きは重さ十二三メより二十メ位の者もあり、長さ一間より八尺位（擡銃の図略す）

円丸を入れる（口）鉄（の筒）穴あり火薬を入れる、以下は木なり煙及音は山砲の小なるが如きも火は三四百米突のみ、何となれば照尺及照星もなければなり、

故に敵の散兵を以て攻撃する有様は全く笑ふより外なし

我等は缸瓦塞雪中戦のかたき討んと潜み伏せと云ひ居り

しが、敵は早や六百米突（三百間）に近きたれば、連隊

長は一度に射撃せよと云ひしかば、二大隊の兵は悉く出

て敵の右翼に急射撃をなしたり、此くと知らざりし敵は、

何を以て驚かざらん、進みかけし者も皆俄に逃げ掛けた

れば総崩れとなり、見る間に八十一名を打殺したる様子

は何とも愉快とや云ん面白しとや云ん、兵等は敵の退走

する事なれば愈勇み立ち一時は歓声を以て天地を動せり

丁度千五百メートル迄は追撃の射撃をなし、それより雪

中をえっさえっさと掛け声して敵を追ひ、

止まりては射撃し、又進む等敗兵の事なれば一も抵抗せ

ず、遂に第十九聯隊の正面にありし敵まで共崩れとなり、

遼陽と牛莊の二道へ向け大敗走せしは誠に心持のよき事

にこそ、平生臆病半分の者まで共に歓声と共に陛下万歳

を唱へようでないか等申したる位の事なりし

八十一名とは師団の竹内副官が一寸調べたる所なりと云へば後にて調査したれば恐らくは百二十以上二百もありしと思ひたり

新聞記者、通弁人も我方面に來り兵卒等にたのみて負傷しある兵をたしめ（試しカ）切りなどいたしたり

師団長閣下・旅団長閣下も來られ何れも敵の死の多きを見て愉快なりと申されしのみならず大歡びなりし、

今日の如き敵に充分攻させ弾薬を費さしめ而して横合より突き込みたる事は二度も出来ざる快戦なるへし、

午後四時敵は漸々退却し我軍大勝を以て海城に還れり、師団長より酒一合つつ渡れり

二十日夜 通報

遼陽及牛莊街道に退却せし敵を追ひて本日子兵大隊は進む

第二軍は艦隊と連合し敵の艦隊を尽滅するの任務を新に受け第二師団及第六師団の残部を大連湾に集め、山東省榮城湾に上陸せしむる為め、十九日より逐次大連湾を出

発したり

大連湾大山大將の報告

上陸点には敵の歩兵三百あり、小抵抗の後退却せり、我海軍陸戦隊は砲四門を分捕せり、

上陸は好都合にて栄城南方には敵兵集合しありしが、西に向て退却せり、多分本日頃は威海衛の攻撃ならん、荣城湾と威海衛とは四里の由

本日より野戦郵便局を海城に置かる、日々郵便を出す事を得、本國よりの手紙は毎日午前十一時に分配を受く、

第三大隊は各中隊とも岫巖へ帰れり（析木城にありしものも）岫巖の守備隊となる、磐嶺及茫家堡子北方一里余の所に敵居ればなり

酒保の荷物到着最中なり

くつ一足到着致候、

本日少々還送品を出す品目次の如し

一 支那婦人の服及足へはく者但し絹計り

一 平壤分捕の茶碗（シンチュウ）及平壤分捕の銭

（常平通宝）

一 支那通用銭

一 支那南京焼茶碗一（大孤山にて）及墨三四挺（岫

巖にて分捕）

一 支那扇一本（岫巖にて分捕）

一 日本扇二本返却、荷物になれば

一 小さき鼎火鉢 大明宣徳年製の印あり（岫巖にて買）

一 ひょうたんの半分（朝鮮安州の品にて水呑の代用なり）

一 ローセキ印

右荷物の中に目録なし、廿八年一月廿四日と記しある荷物、朝鮮地内土人や人夫が荷を開く事なれば届かぬ事あるやも知れず

又雪融来る四月頃ならでは本國へ達せぬ事故に

余り銭目の品は入れ不申候

拝啓仕候

去る十九日に手紙差出候、又々今日よりは日々郵便局にて取扱の事に相成候に付一通差上候

去る十七日及廿二日は海城北方にて清兵の攻撃を受けし

も、何れも大勝に有之候、委細は別紙にて

御承知被下度候

第二軍の一部（第二師団と第六師団の半部）威海衛攻撃の爲め出発し上陸せんとの事なれば本日頃は多分又威海衛を取りし事と奉存候、誠に清兵の骨なり、又戦争の何

を知らざるには驚く計りに候へとも何分武器の精と弾薬の多きには驚き入申候

去十月廿八日の御書状、十二月八日と十一月十七日辰次郎への御書状は相見仕候、辰次郎も至て無事に罷在候

当地気候は大抵○度上十度位より朝夕又夜は○度下十度位に候得共、家屋の造り方宜敷より日々こたつ同様暖ため休み居候、又毛皮、毛布等も都合三枚渡りたれば聊か寒気を思ひ不申候

当時にては先づ何品と申して別に不自由無之、何物にても求めらるべき様相成候間御安神可被下候、但し新聞位は郵便にて御送り被下候は、結構に候

何れ三月中頃迄は迎ても当地を出発する事無之と存候、又何れへ参るともやはり第一軍何々・にて通じ申候

先は時下御伺申上度併せて無事御報知迄、早々 頓首

一月 廿四日朝 海城 山岡 金蔵

父上様

日記は二十二日迄に候、二十三日已降は又々二三日の後可申上候

切手有之候は、拾枚計り御送り奉願候

一月二十六日 海城縣發信

一月二十四日付を以て二十三日夕一書差出せり、同時に

久居谷田佐脇上月等へも又飯田へも出す

一月廿三日

遼陽方向の敵は尚西煙台・西土城子・長虎台の辺に停止し其主力は乾線堡・隆家屯・老牛圈附近にあるものもの如し

又牛莊方向の敵は莫七屯附近に停止し、其主力は耿庄子・牛莊にあるものもの如し

營口街道上高刊には敵なし

在 岫巖 酒井少佐の報告

本日蟒洞炎附近に出せし斥候報告によれば、磐嶺には依然敵兵守備せり、土人の言に敵の斥候は夜間屢々蟒洞炎附近に至る、又吉洞炎鈎隆口磐嶺を合して清兵約二千、團田備に約千人あり、しよ將軍之を率ひ吉洞炎に居れり

一月廿四日

本日余は騎兵大隊と共に牛莊方向の敵情偵察の爲めに大馬頭に至る(一小隊を以て將校斥候)其結果は、

西部三台子には敵の歩兵あり、兵数極めて小数なるが如し、西部三台子より麒麟村の中央なる河樹屯に敵歩兵約五十あれども、午後一時頃西部三台子に至れり、此敵は我斥候を見て射撃せしが、後には監視兵を置きて喇叭太鼓等をたたき喧躁し居れり、旧正月前の事なれば定めて

遊戯せるならん

小台子には少数の歩兵あり、我騎兵斥候に向ひ擡鎗（二人持の銃）を以て發射せり、小台子より四方に敵騎三名運動するを見る、土人の言に砂河沿白旗堡に敵兵ありと、牛莊には敵の歩兵二千人あり是等の敵兵は一昨日戦鬪後敗退せるものなり、

午後三時五十分きんさい乃木少將通報

大平山北方まで攻撃し来りし敵は僅かに砲戦をなし、西北と北方に二縦隊となりて退却せり、

捕虜 王英中の言（一月二十二日の戦の時の）

遼陽地界内分水堡目下依將軍の兵二千ありと聞く、漢辺外の兵五百人にして依將軍の指揮に属す、依將軍の処在には旗八本を樹て、紅墨白と各旗各色なり、統領（日本の大佐位）中に榮、札、二人を知る各四營を指揮せり、戦鬪の当日は銅砲二門を有せり

他の捕虜の言

長將軍の率ゆる兵はエンスター及びモーゼル銃（独乙製）を有し、彈藥百五十發を有し内半部は携帶し、半部は車に載せ後方にあり、依將軍の率ゆる兵は前にモーゼル銃を有せり、彈藥は去る十七日の戦に五十發を与へられ、第二回（二十二日）に二十發を給せられたり、但し第二

回の時は給せられざるものもあり、後方より彈藥を送り来ると云ふのみ、小口径の連發銃は依將軍の部下にして哨長（日本の下士）以上の一部之を有するのみ、長將軍の部下は之を有せず

序に記す、二十二日の戦に敵の死者三百五六十人以上あり、捕虜は少し、是れ傷者にして歩行し得るものは皆逃げ去り又は引連れて逃げたり、歩行し得ざる傷者は大抵銃剣にて殺せり、故に敵の傷者は少くも五六百人以上なりと云

我軍の負傷者は二十四名（四十名位ありし由なれど他は皆尤も輕傷にして療治に掛らず）内第六聯隊は八名、何れも皆輕傷にして丸の通らず止りしものは二名のみ（第十九三隊一名、第六の二中隊一名）是は衛生隊にて取調べし精確の数なり

本日追送品来る、ローソク、マッチ、楊子、カンヅメ、及魚センベイ、煙草、正に受取申候、外に大坂朝日と扶桑若干枚千金丹あり、桑名貫一の事あり、小生の名まで御引合に出たり、岡崎龜彦衛生隊に來り居れり、本日来訪スコッチ、クツ下一足を贈らる

一月二十五日

二十三日午前宮城灣發、第二軍より左の通報あり

第二軍指令部は二十三日午前上陸点に達す、上陸好都合にして第一第二回の上陸を終り今朝より

第三回の上陸に着手す、第二師団は本日榮城縣高家

庄附近に達し二十五日より運動を起す予定なり、榮

城湾附近にありし敵は約二營(千人以下)にして威

海衛方向に退却し、目下砂争庄には敵を見ず

序に記す、宮城湾は威海を去る十三四里にあれば早けれ

ば今明日遅くとも本月中には威海衛陥落の捷報あらん

本日衛生隊に至り鷺津及岡崎軍医を問ふ、二人とも無事

ぶどう酒、少々酒保に着す、依て若干を分買せり、聞く

朝鮮内地の運搬にて割れたり、又取れたりして完全のも

の半分位なりと、何品によらず、凡て此の如し、何とか

方法を立てたき事なり、

酒保物品の最高及最下價次の位なり

状袋(一錢位のものにて) 八錢と二錢

煙草 十錢のもの 拾五錢と拾二錢

郵便切手 二錢のもの 八錢と二錢五厘

手袋 十錢位のもの 三十錢と二十錢

酒類 大抵日本の倍

食用品 大抵 五割以上高し

右の如しと雖 需用多くして品足らず、第六聯隊の酒保

は大抵三割以上五割、時としては、七割高位なれど、師団司令部附の酒保の如きは二三倍より四倍の高價なるありと云

遠藤騎兵中尉に面会、同人も健在なり

時歌聞きたる儘

國が廣いとて けんたいぶるな 國が廣て城持て

それで軍に勝てるなら 鴨緑江や九連城、缸尾寨の

戦になぜに軍に勝てなんだ

是は奥州仙臺陸奥守の換へ唄なり

此日は支那の元日なり、元日には朋友親戚集り、互に目

出度文字を書き門戸室内等へ張り付ケルナリ、又爆竹ト

云ヒテ火薬にてはなびの如くポンポン音させて、悪魔を

拂ふ事をなす、支那人の元日には米飯猪肉(猪とはぶた

の事)を食ふ支那人は故に皆寒きに関らす髪を結び直し

頭を剃る

支那の僧は丸ぼうずなり、

年礼の客は彼は酒呑みて赤き顔をなす、くつ計りは新し

きも衣服は新しからず、本年は兵乱あるにより此の如し

と

俸給受領す

二十六日

本日は支那の元旦なり、年初なり、如何なる事をなすか
尚後便可申上候

×

一月二十六日午前十時記し了、海城にて 金蔵

父上 様

支那人は南瓜及西瓜の種をいりて食ふ

当時追送品は到着最中、酒保大繁昌、爾後追送被下候時は（誰様にても

かんづめ。わけものの品。等食品が上々に候

夏物もゾボンや襦袢の外は何も入用無之候

諸家へ宜敷

本日より為替取扱相成候

二月二日 海城縣發信

一月二十六日には一便差上候

一月二十六日

一 牛莊街道上西三台子には敵の歩騎兵あり、兵員詳ならず、耀州、虎璋屯、昆電、等の地方に無頼の徒約三十人目下張大人の部下に在て号衣（兵服）を脱し間諜（もみの事）をなすと云、張大人の兵は目下營口附近にあり、明日營口及牛莊附近に騎兵斥候を出す、補兵千余人（二月十五日、十八日、二十一日、二十四日、二十七日、

三十日、二月二日を以て大連湾に向け出發）尚四百余人
本国にありて出發の準備をなすと云、此時宇の大尉及内
田中尉は来ると、

小松宮殿下參謀総長の由有栖川殿下は病氣にや

一月廿七日

騎兵大隊は不相變牛莊、旗堡、營口方向を搜索す、序に
云、營口港とは牛莊港と日本にて云へり、されど牛莊と
營口は七八里も巨れり、營口は外人居留地なり、牛莊は
何でもない所なり、遼陽方面の円瓢子及西土城子には敵
兵あり、其数詳ならず午前十時頃敵歩兵約百名及騎兵十
五名砂河沿に侵入せりと（我を去る二三里位）

牛莊街道の西部三台子、西二台子、哈達碑（西部三台子
の東南の村）附近には敵の騎兵斥候の如きもの徘徊す
（海城の西北四里）

本日前哨にして余は小哨にありしが、騎兵の山村中尉来
りたり、其談に曰く、騎兵は三日に一日休むのみにて毎
日外に出でづめなり、少数騎兵には困難なり、又曰く、
騎兵は乗馬しあれば膝より下覚へなし、さりとて支那靴
にてはあぶみ踏めず又長靴小なれば二枚のくつ下は重ね
らず、雪靴は大にして鎧に入らず、殊に馬上にては西北
に向ふには寒に耐へず、故に第一は凍傷者の多き事にて、

先づひき馬同様ならでは行く事能はず云々

我将校等にて本国へ還送する物品中にて中には分捕品多く、殊に器物等もあり、又父兄等は自慢に之を話す等の事あり、分捕品より掠奪品ある事なれば爾来は將校の還送品も一時補充大隊へ預る事の由に聞く

一月二十八日

砂河沿土人の言に、韓辺外の敵は目下三百人に過ぎず遼陽に向ひて退却せり

間諜の言に新曆二十九日の日に賀歳式を擧げたる時樹立せし旗故なくして倒れたり、又同日發砲演習を行ひ砲六門の内二門(旧支那製の砲)は其砲尾を破損せり、依て之を不祥の兆として士氣沮喪せりと云、支那人は随分御幣かづぎの方なれば此説實際ならん

明日騎兵は歩兵一小隊と一泊の積りにて高刊、藍旗溝方向へ派遣せらる

牛莊街道の西部二台子には敵の主力あり(我を去る四里半)

本日は威海衛攻撃の日なり、

第二軍糧餉部陸軍三等書記向井佐の助より手紙来る、一月五日には金州にありと、本日寒暖計最下は氷点下二十四度なり

一月二十九日

長虎台(遼陽街道)に出でし斥候は長虎台に達す、土人の言に、長虎台附近の敵兵八營(二三千人位)は昨夜半退却せり

又東西煙台には敵を見ず、乾線堡に退却せしものの如し和尚溝馬風屯方向には異状なし

目下敵は揚相公三道嵩子、大奠屯の線に止れり

牛莊街道上白旗堡以東には敵兵なし

牛莊街道の本道にある敵は軍服を着ず、間道にあるものは民服を着て間諜シノビをなす、本日日々新聞新井来る、同人の語に第一軍は非常に困難と激戦にあへども、旅順口の如き本国の喝采を得ず、去る二十二日の戦も定めて編輯局の片隅へやらるる事ならんと申し眩き居りたり、依て同人に一詩を示したり

宋慶公号裕祿郎。盛京省任汝防攻。盛京省外有大陸。李爺回謀何所通。

自暴戰勝誰肯信。請哀又搜軍実充。倭艦艤在宮城湾。不日横断渤海洋。

一軍控背一軍胸。宋祿遂為耄六公。耄六々々何時戰。寧投武器謝無功。

頃者来屯海州城。髀肉有鳴兵氣隆。

之を示して共に一笑したり、但し新聞記者前夜吟詩して

我前哨帰りの夢を破りたればへんぼう旁々に見せたり

本日連隊長より酒を受く、度々将校へは賜る千万多謝

師団長本日出発、岫巖の軍司令部に至る、聞けば、奥第

五師団長も参會せられあると、軍議何なるや、遼陽・奉

天の事か、何か不分

寒さと計りにては分らず、依て寒氣の強き事を陳べんに、

障子のガラスは常に全く氷にて閉じられ、日中ならでは

融けず、殊に夜間になれば障子のさんには我室内の空気が

障子紙に触れて氷となり、雪となり、白く積みあるにて

知るへし、又支那の家は多く北を防ぎ南向きにて日受け

のよき様に作りあり、

酒保の為に内々せきけん葡萄酒一本を得たり、味噌

瓶へ湯を入れこれにて入浴、石けんにてあか落しせり、

半日にてあか五六升も出でたり、足の皮は一面にむけた

り（凍傷の軽き故に）体は軽くなり、顔も始めて鏡に移

（映）れり

当地唯今無事なればひまに有之、朝から晩まで仕事なし、

されど兵には射撃の預行演習をなさしめ、又コールミー

と云ひて高粱米タカキビのからを薪の代りに集めさせ又

は防禦の工事をなさしむ

一月三十日

本日は風あれども先づ暖かなる方なり、新聞借りに諸方へ駆け廻る

老牛圈・大富屯・交界台には敵兵を見る多分敵の斥候ならん

遼陽街道上東煙台には敵兵二三十名あり、土人の言に乾

線堡には敵兵二千名ありと、張將軍は目下揚相屯にあり

と云

本日缸瓦寨に於てモラゼル及エンピスター小銃弾合計七

万發を分捕せり、これは叙と云ふ家の穴蔵にありしを發

見せりと云

上野騎兵少尉の報告 三十日午後七時興隆屯発

騎兵小隊は昨二十九日午後三時高刊に達す、高刊附近村

落には敵兵なし、高刊已東の道路には両三日已来敵兵往

来の跡を認めず、土人の言、東昌舖・猪心浦等の村落に

は敵兵屯在せず、石橋子以南の營口及田庄台の間には多

数の敵兵存在すと

午後二時三十分敵の騎兵約二十騎藍旗溝より腰屯に入る、

彼は我斥候を認め其十騎を放て西部蓮花泡まで迫来せし

も、是れより東方及腰屯より南方に前進せず、又之と同

時に二騎の騎兵腰屯より馳足にて藍旗溝方向に去れり、

敵の後続部隊あるを發見せず

蓮花泡土人の言によれば、藍旗溝附近に敵兵なし、又一
昨二十八日も約三十騎牛莊方向より藍旗溝を経て腰屯附
近迄来りしも、又牛莊方向に帰れりと

騎兵大隊は明日牛莊方向又斥候を以て遼陽及栄口方
向を搜索す

一月三十一日

牛莊街道の西部三台子・二台子に敵兵なし

遼陽街道上東煙台南方高地に敵歩三十名、又同高地の西
方部落に敵七八騎あり、土人の言に是等の敵は乾線堡よ
り来る

三十日午後五時飛雲寨發、乃木少將報告

間諜数人を使し得たる報告によれば營口方向の敵は
少くも二万余り、漸次南進するものの如し、
老爺廟は敵の占領する所となれり

本日師団に至り一月十二日の新聞までを見る、又田中尅
一氏に面会、フラン袴下一着を買ふ、雑談して返る、
威海衛の事は本日遂に何にもなし、待兼る

二月一日

二月一日午後一時岫巖發、小川少將より左の通報あり
第二軍は一月三十日午後前七時より百尺崖所及其西南に

亘る高地を攻撃し、午後二時頃に至り同高地の諸砲台を
占領せり

敵の艦隊は尚湾内にあり、第二軍司令部は其後北部温泉
湯、第二第六師団は各其占領地に宿營せり、

右の電報にて見れば先づ人の下あごを取りたると同
様にして又口には水雷を設けあれば支那艦隊は袋の
鼠なり、尚愈威海衛を取りしは昨日なりしか、後便
を待つ

本夕工兵少佐小島好□氏を問ふ、同氏は旧士官学校の教
官当時第一軍の電信掛なりと

同氏の談に、朝鮮内地は凡て朝鮮官吏に軍用電信保
護を托したれば、近時は切る者少し、切るものあら
ば朝鮮の地方官を罪する条約なりと、清国にては去
る事能はず、故に時に切られ為めに一日後るととき
は大変なり、一ヶ処切らるれば大抵二百信位は後
ると

善後公署今は第一軍管民政事務所にて島少佐の話

敵の捕虜を尋問せしときに長白山の北なる昔し匈奴
の馬賊の隊長漢辺外ハンヘンワイは五百人を以て去
る二十二日に海城を攻撃せしとき、敗れて部下三百
人を殺せり、然るに彼の依將軍は一の賞もなければ

却て敗兵なりとて叱せしかば、大に怒りて旧地に帰りしと云

近頃は閑暇多けれど寒気強く外出する心持もせず、日々地図を開きて前進の噂計りなり、先づ一二説を述べん

- 一 第五師団は遼陽位にて奉天には進まず、奉天に兵の多く集る様にし他師団は山海関に向ふ事
- 二 第三師団は營口より乗船錦州湾へ上陸し山海関に向ふ
- 三 第二軍は山海関の西方へ上陸する事
- 四 陸行して山海関に行く事御免、湿地にて人家少く七十五里の行軍はいらい
- 五 山海関は天下第一之関と云ひ、随分堅固と云、されど少し北に廻れば山路あり、之れより進めば大丈夫
- 六 二月中旬頃よりそろそろ雪融ける行軍は難儀にて本道の外は膝までどろ水悪しく泥水潮水の上一望千里の地
- 七 講和よろしい、早く沢山償金を出したる上旅順と威海衛とは我物にせば何時でものをしめらるる、又臺灣でもよし、こらへてやる
- 八 奉天へ行くは損なり、行くときは運搬に困る、

依て早く山海関の後ろへ上陸する工夫が第一
九 營口や牛莊は何時でも取れるが進まずして多数の兵を我に引き寄せ北京に一兵なき様するが面白しき計なり

十 第二軍は日本よりの運送自在にて兵卒一日も食物に苦勞せず、又旅順を取りたとして大評判、第一軍は朝鮮より日々難儀の目に逢ひて一つも評判にならず、第一軍が鳳凰、海城に來らねば第二軍は何とも仕方のなかりしに、然るに、日本にては其事を思はず、又氣候は○点下三十一度の地にあり、第二軍は暖かに居る毎日不平と云ふにはあらざるも、浦山敷の評判(威海衛の図省略)

宋慶來ると云ふも來らず、山海関近傍は彈藥糧食の運搬中なりと
何万人の敵たるも皆新募兵多し
師団長は過日岫巖の軍司令部に行く、明日帰らるる何の會議にや

二月七日 発信
謹啓

愈御機嫌克被為渡候御事と奉存候、私も無事、御安心可被下候

威海衛も思ひの外の落着にて、僅に偵察に出せし二大隊にて、一兵をも損せず占領せしとは夢の如くに思はれ、日本にても祝酒一杯を呑みそこないたる人も有之候やと思ふ計りに候、又敵の軍艦は八艘程威海衛と劉公島との間に散在すと云へり、如何に支那人とてむきずいけどりには行くまいなれど、先づ袋の鼠には相違なく候、

右は二月一日の午後一時の出来事にて二月五日に相分り申候

蓋平にありし乃木閣下は一昨日営口に向け進む、我第二大隊と第十八聯隊の第一大隊及砲兵一中隊は缸尾寨と高刊方向より此敵を脅威する為めに出発したり、又昨日此方面に砲声聞へたり、如何なりしや知らざるも多分営口を昨日は取り見事宋慶の二万人を破りしならんと思ふ、

此隊は佐藤大佐指揮す辰次郎も之に加れり

昨日午前八時山縣中尉は牛莊街道の方へ斥候として兵二十三名を率ひ出發せしが、九時半頃中央堡より小馬頭に至りしとき此村に清兵凡そ五百騎兵五六十もありし、

此前に山縣中尉は一人の下士に命じ小馬頭の東よりせしめ自分は西南より入らんとするとき、先づ兵二名を先行

せしめ、自分其跡に次で小馬頭に入り、村外れの土人に清兵居るやと聞きしに、居らずと答へたり、

又東より入し下士斥候は敵を見付けたれば居ると山縣へ知らせしが、山縣は聞かずして無理に村内へ入り一人の兵に命じ土塀より内を見せしめたれば、清兵凡そ二十名計りも休み居りたり、我兵を見るや何事か云ふと見れば直に二十人は銃を向けて射撃す、山縣の先きへ行きし兵は此声を聞きたれば後へ還る事は出来ず、其内敵は喇叭を吹きたれば二三百の清兵と六十騎の敵は山縣等を三方より取囲みたり、山縣は軍刀を抜きて斬りかかりたれど大勢に小勢其内に数百の敵は四方を囲みたれば山縣等は如何なりけん、其儘生死不明となれり

山縣中尉に従ひたる下士兵卒は敵の射撃の為め進むを得ず、又山縣は敵と凡そ二十米突（十間位）まで近寄り軍刀を抜き居るを見たれど、是れ又救ふ事を得ず、皆々散々に逃げ帰りたり（此内一人は遂に敵丸に中り途中に死すと云）

此の射撃を聞きたる我騎兵は進みたれと小馬頭の敵は遂に牛莊の方へ退却せり、其跡で土人に聞き漸く一人の兵を殺して埋めありし所を知れり、されど自分の物品は一つもなく、又首もなし（其兵の名は今忘る）、外二人は（山

縣とも）持ち去りしと定めて討死せしならん

村山大尉は此事を聯隊長に報告するや、聯隊長は大に怒り、何故兵卒は山縣を助けざりしや等と云はれ、是非山縣の死がいを取戻せと云はれ、昨夜第一中隊の一小隊は夜行して小馬頭の方向に進みたり、其後の事は今不分明なり、

全く将校等の清兵をあなどるよりして冒險な事をなすによるとは云へ、実に山縣中尉も無残な最後を遂げたり

唯今までは生死不明と云ふなれど無論自ら死せしか又は殺されしに相違なかるべし

此小馬頭は我前哨線の前方凡そ一里半位の所にて、今二三日敵は牛莊より爰に進み来りしなり、依克唐阿將軍の部下凡そ二千人位なりと云

右申上候、本日は日記不差上、只急變の事を申上候、

氣候は漸々暖に相成申候、○点下三四度位に候、至て無事健康に候、

頓首謹言

二月 八日

金藏

父上様 皆々にも御聞せ被下度候

二月 九日 発信

二月三日

本日郵便を出し翌日も亦一通を出したり、共に家事用明日營口街道に下士斥候を出さる

英国タイムス新聞記者營口方向より来り我師団に附属す明日より衛兵一般に小夜食を給す、パンかまんじょうの類

二月四日（前哨）

牛莊方向の敵状次の如し

午前十時頃小莫屯より円瓢子に向て敵の歩兵約七八十名前進す、円瓢子よりは前進せず、円瓢子東端の土壁には銃眼を穿ちあり、土人の言に大莫屯には敵の歩兵一千人あり耿庄子には歩兵二千人依將軍も茲にありと

本日我斥候は馬富屯に於て小銃三挺拳銃三挺軍刀一振を分捕せり、普頼屯街道土人の言にとうごう堡には（牛莊と安山店に至る道路の北にあり）清兵の負傷者四百あり、新曆二十八日此地に来る多分去る二十二日の戦にて負傷せしならん

明日牛莊・營口及馬富屯方向に騎兵を出さる

本日旅団より出されし騎兵の報告には缸瓦寨及コーリユウトン近傍には敵なし、

本日東本願寺の特派教師海城へ来る

第二大隊は第十八聯隊の一大隊と共に二泊の預定にて
コリユウトン附近にて敵を牽制する為め佐藤大佐引
率出發す、砲一中隊之に属す、是は蓋平より營口に向
ふ乃木旅団の運動を容易ならしむる為めなりと云

本日午前十時頃諸兵連合の敵凡そ六百人四台子より海
城方向へ前進す

本日威海衛の報あり、已に前便に述べたり略す

二月五日

本日午前十時三十分敵の歩兵六百名・騎兵五十名・砲二
門は四台子より前進し來り、其一部は東部三台子に入り
目下停止し前進の模様なし

二月六日(前哨)

支那人にて銀貨の贋造をなすものありし由

佐藤大佐報告 蓋家屯発

小馬頭に出でし斥候報告

午後一時三十分頃、斥候は小馬頭に着す、敵兵なし、該
村西端森林に敵騎二名ありしも退却せり、土人の言に敵
の歩兵昨日昼頃百八十名四台子より來り、同村東端に宿
泊せり、今朝敵騎十四五名往來し、今朝日本兵と交戦し
十時頃退却せりと(是れは山縣中尉の戦死の事なり)

第六聯隊第一中隊の二等卒石井喜太郎の屍小馬頭の中央

の北端なる寺の処にあり、首級及手なし、其他所持品一
品もなし、依て屍を土中に埋め置けり、土人の曰く他の
二名は支那兵荷ひ行けりと云へり

総て敵は牛莊へ退却せり

序に曰く、山縣中尉は本日午前七時蘓家堡の前哨中隊
より出發し、下士二名・兵二十一名を率ひて中央堡に
至り、土人に敵は小馬頭に居らずやと問へば清兵不在
と答へたり、依て下士一名兵若干より小馬頭の東南よ
り進め自ら西方より行きしに、村の中程にて敵の為め
に不意を襲はれしなり

下士兵卒は之を見て皆逃げしも、山縣はにげ道なく、
依て軍刀を以て戦ひしも及ばず丁度股に一つの弾丸を
受け腰に□□の如き槍の先の如きもの折れ込みあり
(之は火葬のとき見付けたり)又軍服の上より腹にかけ
縦にきりきざずあり、多分自分が突きしものならん

又山縣の屍は首なく右手くびと左うでなし、又靴なし
連隊長は大に怒り、其夜直に第一中隊牧少尉に命じ、小
馬頭に至り、山縣の屍を取戻しに進ましむ、依て第三中
隊は前哨なれば、共に兵を出し小馬頭に至りしも、山縣
の屍を見ず、各家に就て土人を起し聞き、漸く四台子に
至る道にて屍体を見付けたり、軍服を上掛け雪にて

假り埋してありしかども、前記の処は牛莊に持ち行きし由にて見当らず、翌朝已むなく屍を持ち海城へ帰る

他一人の兵は牛莊へ連れ引かれしと見へ屍体もなく遂に今以て分らず、嗚呼上官の危を見て助けざりし下士兵卒等は如何処分なるべきか、せめて十人も共に山縣と死したらんには隊の名譽にもあるに、左あらずして小隊長を見捨て逃れしとは実にたのみ甲斐なき兵卒下士にこそと一般に批評する所なり

山縣の死に就ては土人の言も一定せず、或は戦ひ中に丸に中り出血しつつ倒れしを支那兵荷ひて両手を張りはりつけにして殺せしと云ひ又自ら首を突き腹を切りしと云ひ、色々なれども逆も角自分も死を極め土の小高き所を楯とし軍刀にて四方八方を切りまくり清兵も近づけざりしは真実ならん、おめおめ生ながらに殺されし事はあるまじ、或は呼吸の絶へずある間に殺せしかは分明ならざれども、まさか覚へある程の苦みを感じるが如き事ではなかるべしと思はる

以上は自分は見又は聞きし事を記すのみにて先便と御引合せ□□□□□□□□□□の兵卒や他隊の者には士気に関係すれば詳には申さず

又特旨叙位の為めに死□□□□□□□□なるも、七日に屍

は火葬せり、未だ九日は祭典をなさず、（親族の人には聞かしたし、又聞したくない憐れの限りなり）、又山縣中尉に敵兵居らずと云ひし土人を捕へん為め兵を出せしも見当たらず、已むを得ず近傍に居りし土人を連れ来り取調べ中なり

此日郵便を出す（日附けを間違へました）

二月七日

騎兵斥候報告

西三台子及二台子、岳家屯、小台子、東高刊には敵兵なし、土人の言に清曆十二月二十四日田庄台にありし一万余の敵兵は牛莊に前進せりと

第三大隊は第十二中隊と一小隊の外皆海城に来る

大谷本願寺、本派本願寺、浄土宗の僧海城へ来る、これから死者も念仏を受けて往生するでしょ、又説教もすると云

浄土宗臨時賑恤部より宝丹一個を送る南無ありがたや

軍事費は軍司令部にて扱ひ師団にては一時振替すると云ふ事になりし

一等軍曹時廣倉次郎曹長となり第六中隊附となる、

二等軍曹となりしものは、上月藤次郎にて矢張り第八中隊附、

二月八日

威海衛の景況

四日、第二第三の水雷艇は突入の後東口防塞の切目より入り、敵の艦隊を襲撃し、定遠は槓に破壊し、濟遠も或は具を破りし疑あり、又昨夜も第一水雷艇突入の後東口防塞の切目より進入し第二十三号及第一号にて七発の水雷を発し致遠威遠及砲艦一艘を沈没せしめたり、我水雷艇は艦も人も無事、明日は陸上砲台と協同し、日島及劉公島東端の砲臺を破壊せんとす、委細は郵便と要港部より通信あり

右通知に及ぶ

八日午前 小川参謀長発、同午前十時五十分届

□□北洋艦隊の始末は次の如し

□□□□遠 △来遠 ▲陪遠 濟遠 □□□□ 操江

△廣乙

訓示

敵の北洋水師も威海衛に於て殆ど全滅せり、今後我陸戦に於ては一層戒心を加へ、作戦に瑕瑾なきを要す、此旨趣部下に注意あらん事を希望す

明治二十八年二月八日 第一軍司令官 野津 道貫

陸軍三等軍医永井堤藏、第六聯隊第一大隊附軍医となる

告示

参謀総長の重任たる、平時にありて已に然り、況や外国と交戦の日に於ておや

昨年清国と開戦已来我軍の頻りに克捷を奏するや

大元帥陛下の聖威聖徳と将校・下士卒の忠勇によると雖、前総長経営参畫の力寔に其多きに居る、而して不幸中道にして薨去せり、不肖彰仁をして之を此職に受けしめられ、恐懼の至に堪へず、然れども勅旨の嚴なる敢て固辞するを得ず、茲に謹て之を拝受し、將に拮据勉勵専ら大元帥陛下の天命を遵奉し、前総長の規畫に率由し、皇猷を翼賛せんとす、須く此意を体悉し事細大となく、毎に彰仁のふてい(不逮か)を補け以て彰仁をして奉ずる所の任務を全ふせしめん事を切望す

明治二十八年一月二十六日 参謀総長 彰仁 親王

野津第一軍司令官

去る七日師団附の二等書記加藤亮より日本酒及びアヒル、醬油エキスを受く、全く同縣人のちなみにて岡崎亀彦とは時々来往す
追送として牛カンヅメ一個、梅干少々、毛糸のづきん送りし人ありと見へ、島田中尉の許に来る、然るに島田君

は已に内より送れり、されば我にあらざるやと云はれしも、送られし二つの内一包到着せず、されば是れなりや、何分皆解けあり（嚴重の荷造りなればとけず）誰なるや分らず、一度御問合せ申候

気候は漸々暖となり、海城内道路の雪とけかかる、されど二尺以上の氷なれば野などは中々雪とけず

前進の風評あれど未だ前進せず、或は牛莊より遼陽奉天へ進むなど云ふ如何にや分らず

久居及上村、大佐中村、東京の川崎、吉武甲子男へ郵便出す、何れも一通も来らず、新聞も一月十五日以後未だ一つも来らず、見ず

十二月廿九日出御書面拝見已後未だ来らず

賑兵部よりたばことフランの腹巻来る

夏服は補充隊より送らるるとき夏袴と夏襦袢袴下各二つづ、送られたし、夏の上衣は不用

是は青山君に問合せらるれば分明なり

同じ包に食物菓子なれば送られたし、其他は不用、日本酒又はぶどう酒等のビンなれば堅くわらにて包み二三本以上も願ひ升

戦地にての楽しみは、第一に食物と飲み物、第二に手紙又は新聞、又は小説本、此外は何とか致して居ります、

吹けば飛ぶ夏の蠅の如き清兵は盗人を見てなわをなうと同様に日々牛莊方向にて射撃の稽古と練兵と見へてぼんぼん音すれど、少しも進む模様なく、全く無茶苦茶に土人を募り兵となし、之に戦争の事を教へる事と見へる、寒稽古中々御苦勞とは歩哨に立てたる兵卒等の口々の悪口なり

されど少数の兵と見れば村中に隠れて居り、山縣の如き事をなすなれば油断は少しも出来ず、一段に用心をする事となれり、斥候などは別して然り、我野砲も近日到来す、嗚呼これにて鬼に鉄棒なる戦争をなす事ならんと存候

補充兵は不日に到着すると存候

岡本少佐は全快せられたり

近頃前哨に多く当り、日記も怠り候、爾後は詳しく記すべく候

支那人の奇風等は多くあり升、故に別に帳面へ書き止めたれば後日の序に送り申べく候

講和使の事も立消同様なり、北京までは進むが宜しい、迎てもちゃんちゃん坊主が我國の望む所の金は惜くて出さねば、北京迄も取るがよいと一般兵卒までの奮発、されど中には腰の弱き人もあり、早く帰りたいと云ふ声も

聞ゆ聞き悪い、糧食は五ヶ月分は積み込みみたり、先づ六合の米に有付きたり、以上申上候

廿八年二月九日 記す 清国盛京省海城 金藏

父上様

例の通り皆々へ御聞せ下され度候

二月十九日 発信 海城より

二月九日一昼差出し日記九日までを記し候

二月十日 午後五時十分岫巖発 同二十分海城着

唯今大本営より左の報告ありたり

本月六日我艦隊は陸上砲台（艦隊の陸戦隊にて海岸砲台を使用するも）と協力し日島及劉公島を破壊するの計劃にて陸上砲台より射撃せし内、敵の水雷艇十余艘港外に出て来る、第一遊撃隊之を追撃して遂に龍門港（芝罘の隣の港なり）に於て破壊、若くは乗り上げの爲め不用に帰せしめたり、又我砲撃の爲め日東砲台の火薬庫を破裂せしめたるを以て目下敵の砲台は劉公島にあるもののみとなれり

敵情、本日午前九時三十分我騎兵は下河加（海城の西一里半）西端に敵の歩兵約十五名と出會し、射撃を受けたり、而して敵の歩兵は正午頃まで前進せず、敵の主部は

缸瓦塞にあるもの、如し、其兵力詳ならず、又土人の言

に缸瓦塞へは營口方向より敵兵到着し、又高刊附近にも、敵兵現在すと、其兵数に至りては明答するものなし、

山縣中尉正七位となる（報告には二月八日までは負傷、

二月八日に死亡となす）

増田少尉及辰次郎は二月七日歩兵中尉となる

山田寅吉中尉十二月十八日從七位となる

酒井、野元、牧、菅沼、吉田少尉は十二月十八日附正八

位となる

第一軍司令官より達

各隊一等卒の数は今回戦役中は現役兵現在人員の央までは充すも差支へなし、

明日紀元節に付将校以下一般酒一合づ、渡る、又国旗を立てる事

川崎・柴山・青山・柴田の遺族へ十円づ、送遣承知せり

缸瓦塞にある敵兵左の如し

歩兵千五百人 馬隊三百 砲四門

小馬頭には敵兵なし、土人の言に西三台子に二三百人の

敵兵あり

二月十一日

騎兵大隊は明日營口及旗堡方向へ一部隊を出し搜索せし

む、第三大隊より一小隊を騎兵に附属し旗堡街道に至らしむ

前哨線で支那人の通行を禁ず（許可せし者の外）

敵情、昨日午後二時頃徐邦道は准楚二軍を率ひ缸瓦塞へ到着せり、

蓋家屯及上加河・下加河には清兵土人の服を着て埋伏せり、斥候は注意を要すと

昨日我斥候下加河に於て貧しき老人に清兵の有無を問ひたるに、彼指示して清兵ありとの意を示したり、依て我斥候は直に退却せり、最近の一清兵之を見認め該老人を捕縛し去る

野砲を瞭甲山へ据へる（明日）是は先づ四門にして後に六門となる筈なり、第一師団と第五師団の後備砲兵にして豫備砲廠の者なり、先般鴨緑江のとき用ひし品にて二門は鳳凰城へ、他は当地へ送り来れり、長は秋元砲兵少佐とす

明日より海城にて為替も取り扱ふ

師団の田中軍吏より葡萄酒一本を受く（ねだりて）此酒は氷りて其風味は脱出せり、甚だしきは口栓の飛出しあるものあり、醗酵せしか、又は氷の爲めに蒸発散せしか日本酒を加藤亮と云ふ預備の二等書記（伊勢の人）より

送り来る、丁度析木城より大塚書記尋ねにまいたりたれば同人へふるまひたり、同人も一等書記（曹長相当）となれり、煙草二百本、鶏一羽持来る気毒の事なり、同人は十三日又析木へ帰れり

二月十二日

二月九日附

第三大隊長酒井元太郎任陸軍歩兵中佐第一軍兵站指令官とならる、岫巖在勤

任歩兵少佐第六聯隊第三大隊長——奥宮大尉

歩兵大尉高木彝次郎（第十一中隊長）は聯隊副官代理となる

歩兵中尉那須仙太郎（第四中隊附）は第十一中隊附となる

搜索は矢張り旗堡及缸瓦塞の方向

不潔物の清拭掃をなすべし、此事後に記す

十二月廿七日出の御手紙着す、大後れなり、但し拝見仕候て安心仕候

二月十三日（前哨に出づ一小隊を以て）

騎兵の一部は明日旗堡街道より牛莊及高台堡方向を搜索す、第三大隊より一小隊を出し附属せしむ

缸瓦塞東燎火に敵なし、東燎火土人の言に老君屯に歩兵

三百砲二門、騎兵三十あり

此外歩兵六百名あり、又今朝十六騎東燎火より西燎火に至れりと、缸瓦塞には敵なし

二月十四日午前一時十分岫巖發同二時海城着

十二日威海衛に於て敵の一砲艦白旗を挙げて来り、軍艦兵器砲台等総て差出に付、軍人外国人人民の生命を救はれたき旨願出でたりと

明日牛莊方向の敵を旗堡街道より偵察す、第三中隊より掩護兵を出す

二月十五日

本日山縣中尉の葬式を行ふ、本願寺の僧三名経を読む、此僧は洋服の上にも着し帽子（此僧は蕎麦山にて読経中雪ありしが、白ぼうずとなり、耳はれたれども終るまでは帽をかぶらず中々熱心に読経せりと聞けり）を用ひ居れり、中々殊賞にもえこう道具は一切持来れり、海城の東にある蕎麦山へ葬れり、会葬には勤務の爲めに行くを得ず、櫻、蓮花、菊の作り物を送りたり（当中隊より）又将校は十円を第一大隊より出す、万事盛大に葬られたり

昨夜雪ふる、又五寸計積りたり

序に記す、四五日以前より格別暖氣にて道路及畑は

始めて土色を見し爲めに雪中に埋れたる人馬の糞及

塵埃は一度に見はれ、殊に道路は雪どけの爲めに洪水の如き有様なるに、糞は解けて水は全くそつぽ

の内の如く不潔云ん方なく、臭気甚だし、日本人の如き潔癖あるものには一日も生活する能はず、又熱

病の原因となれば、俄かに穴を堀り又は溝を堀りて水さらへをなす等大掃除をなしたり、然るに昨夜夕

刻より雨ふりたれば今日は又々大水ならんと思ひの外十時頃より雪となり、日本にてはとても積まざる

雪なるが、当地にては今朝までに何の苦もなく一尺計りも積り、折角掃除せし所も又雪に埋められたり

土質一般に泥にして先づ深き所は日本の泥田の如きものにして格別に畑は全くの泥田なり、道路にても

河川にても畑にても凹みたる所は池の如く日本にて如何に悪き道にても当地の雪どけの道路の悪しきには及ぶまじ、車の如きは二尺五寸より三尺も深く入

り動く事出来ざる所あり、

河は氷解けてある所より水噴出し氷の上に水流る河は堤なければ水は広くなる限りは広くなりて流る

日中は家根より雪とけて一日雨だれの如く水落つ、とゆなれば下は流れ次第なり、雪のある所は風あ

る毎に霧の如くなりて飛ぶ

右の如き有り様なれば愈当地を出発するときは雪中よりも一層行軍や戦闘難儀ならん、何となれば支那には元來道と云ふ程のものは本道のみ、凡て雪中は人の足あとを取りて道となせば畑の中も河の中も道なりしを、愈雪とければ畑中を通らねはならず、此畑は先づ泥田の如きものなればなり、此本道も道と云ふまでにて、処々に大なる凸凹あれば車などは最も難儀なり、我々ですら日本道の倍より多く疲れるなり

井水は皆にごり一も良水なし、河水も亦不良なり、依て明礬メウバンにて清まし湯にて呑む、冬なれば河水や雪丈けは良し、今後は湯より外に呑み水なし、皆泥水の如く石灰を混じ又は塩水の如く殊に道路のくそみづ落入れは何となく臭気あり、飲水には困難なり、

通弁人の事

通弁人として北京や天津や上海の語は満州に通用せず、故に満州旅行するものは満州語を学べし

愈支那人と同一風をなすものは、第一手鼻のかみ方。髪のゆひ方、歩み方、机により方を覚へるへし。亦

煙草を飲む者はこよりへ火を付ける事を稽古せざるべからず、又顔手足は洗ふ可からず等なり、

「歩行法はちよこちよこせずして足を大きく外へ廻しつつゆるりゆるり歩むなり、決して急がず

「煙草を吹くものは先づ紙をこよりとなし、之へ火を着け口にて吹きて火をとほし、此とほし火にてたばこを飲む、こよりの作り方はゆるくして二三枚も巻き込み中をからに作るなり、火を付け口にて吹けば火がとほる、其吹き方下手なれば火がもえず

「手鼻をかむには左手にて鼻頭を抑へ、ふんと一いきにて鼻を出し飛すなり、下手なれば手から其他衣類へきたなく着くなり、支那人は上手にてひげにも着かず、二三尺も前へ勢よく飛出すなり

「支那人は机の上にて書字するときは両臂を両脇にはり腰を屈指俯してなす、日本人のごとく両臂を張らずには一字も書せず

「支那人は筆。錢。等を帽子の中。つつ袖の中。又は胸。又は足。□は靴の中へ入れる。錢は多く靴の中に入れ、踏み居る、但し一分錢は知らず、銀貨の事なり

「支那人は黄色を尊ぶ、清国帝は黄色の服なりと云

「支那人は僅かの事にも手まねをなす、其驚きたる
ときの様子は最もおどけの上手なるものになければ
真似出来ず

「支那人は日本刀を見て銀なりや問ふは殆ど一般な
り、支那の刀はなまくら多ければ日本刀を見て其鋭
利に驚く、故に之を抜き見すれば清兵はと云ひての
どに手を当て仰向きあつと呼びて殺されると云ふま
ねをなす、諸人皆同じ其様子は最も可笑

本日迄の来状

一志郡八知村高等学校青木弥太郎より、依て返事す

度会郡大湊鳥羽初太郎より同右

同右

皆見舞なり

愛知中島郡福沢飯田氏より 返事は出さず

三好よりは収の事の礼状

一志郡久居西たかと三好収祖母キミより 返事す

恤兵品(十三日 及 十四日)

煙草恩賜 二十五本(但し一寸巻)

まわた 皇后陛下の恩賜

まわた。フランネル腹巻。手袋。茶一斤。巻煙草二百

本

酒一合。わらぐつ 壹足(之は陸軍省より渡る)めり
やすちよつき。

わらぐつは寒中には最上なり、されど此度は長さ二
尺巾五寸位(くじら尺にて) あれば仁王ならば丁度
よからう、余が如き十文以内の人物は靴の上、穿き
ても尚一人分余り歩行には困りたり、併し温き事は
一番上等なり、今少し小なれば最上々々々々々

十六日

本日は昨日より掛けて当中隊は勤務中隊となり城門の守
備に当る、定めて無事なれかしと思ふ中に午前八時砲声
を一は歡喜山(遼陽方面)、一は唐王山(缸瓦寨) 方向に
聞く、いざや大変なり、二道より愈攻撃し来るなりと思
ひ、先づ我受持の南門に馳け走る途中師団司令部の前に
至れば、非常の喇叭を吹くやら、伝令は四方へ走り、一
万以上の敵西方と北方より攻め来ると知らせたり

余は直に日直の佐川工兵少佐の許へ行き、四門の衛兵を
工兵隊と交代する事を依頼し、十一時頃に漸く瞭甲山に
行きたり、瞭甲山は城西半里にあり

余が此山に至りしときは唐王山にては第十八聯隊は第一
大隊と第六聯隊の第二第四中隊は戦の最中なりしが、俄
に敵兵挫けて中央堡の方面に退却せり

瞭甲山より我野砲にて之を射撃せり

聞く、敵は唐王山の前まで来りしが、我射撃の爲め五六千人計の兵は散々に逃げたりと、死傷者百人もあるよし、皆敵は持去れり、我兵負傷なし

(戦鬪の略図を省略)

又遼陽方面は第六旅団にて守りしが歡喜山にありし我兵二名負傷せしか、敵は同じく敗退せりと、死者詳ならず、捕虜は二百人ありと云、又軍旗も七本を取れり、此方面の敵も同じく四五千人ありしが、唐王山の方面が多かりしは瞭甲山より一覽せり、敵は何の爲めに来りしや、攻めに来るのか又は死にくるのか、又は演習と思ふて来るのか、我砲兵に向ひて射撃せし弾は一も達せず(瞭甲山の方面)又我歩兵は殆ど一弾をも打たざりし(我第六聯隊の方)

今日は夕刻まで瞭甲山にて見物せしが、敵は退却して来らず、諸隊は海城へ帰り警急舎營す

十七日

午前八時又出發して瞭甲山に至る、本日大風雪の爲め兩軍とも戦はず、敵は少しく退き小馬頭にあり

敵の捕虜の言に呉大徵は八十營(四万人)を率ひて奉天府より来ると、真か偽か分明ならず、先づその積りで用

心

午後より風邪の爲め気分悪しく余大隊長の命により海城に帰り療養す、大隊は本日より前哨となりたり、敵は大砲多く有せず、白砲を打つと見ゆ、一発毎に場所を變ずる故に、我砲兵は距離を測るに困難す、古來に聞かざる敵の砲兵の拙なさ

又敵は又火矢を用ゆ、其弾の形 □□□(図略)の如し、何百年前の品物にや、当時には何の用にも立たず、補充兵来る八百人なりと云、宇野大尉も来りしと、何れ帰らるる事ならんか、内々々々の説

十八日

本日は第二軍は蓋平に来る日なり

我野砲は本日六門着す、愈これで十八門の野砲あり、先づ砲兵の事は安心せり

本日も風邪の爲め海城にあれど、敵が近ければ安心にもならず、又病氣も頭痛なれば、明日は是非出發して前哨へ行く積りなり、

新井来る、日本小兒等までの敵愾心を聞き感心す

本日は好天気なり、此天気にも敵は盛り返りをなさずとは如何や

十九日

本日前哨線へ赴く、敵と一戦する積りなり、されど敵は退くや又止り居るや、今以て明ならず、何れ二三日の内
に再便可申悉候

風邪も今朝は全快なり、御安心下されたし、病気の少き人物は僅かの病が大げさに相成申候

二月十九日

於海城

金蔵拜

父上様

所得税届の事は後便に聞合せ可申候、それにて間に合はざれば補充大隊にて聞合せの上三月三十一日までに御届け下されたし、実は不日に一等給の来る積り本月二十四日には当地出発の噂もあり、

皆々様へ宜しく

此度の戦争事は尚能く聞きし後にて逸事を申上ぐる積りなり

二月二十六日海城発信

二月十九日

本日附を以て軍事郵便を出す

宇野大尉は補充兵二百名を率ひ大連湾より蓋平を経て当海城へ昨夜着す、依て追送品及靴・新聞は目録の通り受取る、辰次郎分同様

騎兵の一部隊は明日(本日)頭河台子附近より興隆屯附近を偵察し、歩兵第五旅団の左翼を警戒す

佐藤支隊は二十日大石橋出発、海城へ帰る

本日大馬頭より二台子へ敵千五百人行進するを見る、但し二三台子の何れへ入りしや不明

石田少佐の報告

東西柳公屯小馬頭附近の敵は五六千を下らざるが如し、又小馬頭、三台子、四台子に敵兵頻りに運動をなす、惟ふに東柳公屯は敵の集合点たるが如し

東柳公屯の敵は一部を破廠八里河子に進めたり、○山砲一中隊を今夕唐王山後に進めたり

明日(二十日)には遼陽及び營口街道に騎兵の一部を出し敵情を搜索す

遼陽街道の敵は煙台以北に退却せり、土人の言に柳河子の敵は昨日鞍山店に退却せり

海城西方の敵は東柳公屯、蓋家屯、缸瓦寨へ一部を残し、其主力は西柳公屯小馬頭附近にあり、第十八聯隊の一大隊若くは三箇中隊は黄竜子に宿する事となる

高木大尉・長大尉・安永大尉は勲四等、村山大尉・北村中尉は勲五等、島田中尉は勲六等、何れも瑞宝章到着せり

二月二十日

信ずべき土人の言によれば、本日老湘宮十九宮（八千五百人）は四台子及小馬頭にあり、徐邦道の兵は東西柳公屯にあり、牛莊にある清兵は目下呉欽差の敵兵三千人あり、此兵土は黄色の布を以て頭部を纏へり、呉欽差は十七日牛莊に着せり

十九日牛莊に出したる間諜の言によれば、明日日兵を攻撃して唐王山瞭甲山を奪んとすと、徐の兵目下逃走するもの多しと、

本日騎兵の報によれば、下河加缸瓦寨には敵兵なし、馬関子・蓋家屯には敵の騎兵出沒す

騎兵一部隊は頭河台子附近より敵状を搜索す

午後六時半石田少佐の報告によれば、前石井堡には敵兵来らず、東柳公屯より来りし土人の言に、同村には多数の清兵あり

破廠八里河子に出したる將校斥候の報告に、土人の言に東柳公屯には清兵一千人、砲二門、西柳公屯に五百人、古樹子にも若干の兵あり、蓋家屯には斥候出沒す、小馬頭には五千、又は一万人なりと云

諸情報により明日は牛莊大莫屯より旗堡の街道より大小の縦隊二台子に集るを知る、明日は定めて攻撃に来らん

名古屋市民の代表者高橋頼造当時に来る

二十一日

本日は予定の如く敵兵凡そ一万五六千人来る、然れとも我に近づかず、唐王山の西方の山に敵兵三千人計り上る、我砲兵之を射撃し、佐藤支隊は側面より丁度攻撃せんとす（佐藤支隊は第十八聯隊の第二・第三大隊、第六聯隊の第二大隊なり）、我唐王山にある山砲を以て射撃せしに散々になりて退却し、凡そ百名以上の死傷を車に載せて退却せり

我守りし団山子の前にある石井堡には四五百名来り、砲二門を以て我を射撃せしかども、近くまで我応せず、而して瞭甲山の野砲は之を射撃せし為め、又々死傷を載せ蜘蛛の巣を散す如く、広き雪野に散乱せしが、中央堡にて収容せり

第十九聯隊・第七聯隊の方向にも敵兵来り射撃せしかど、我は近づくまで射撃せざる為め唯砲兵の弄ひ物にて退却したり

此日の傷者我軍即死一、負傷者一と云、外に將校一名微傷あり

敵は何をなす為めに来るか、砲兵一発にてばらばらするを以て見れば、如何に清兵は心得居るにや、此等を後の

山から見物する新聞記者等は大得意の大しばい見物と評したりき

タイムス新聞記者は之を写真に取りたり

此戦に捕虜二名あり、弾薬百五十を取りたり、敵は小馬頭、三台子、大小富屯、長虎台、二台子の線に退却せり、此夜命令あり、第三中隊は明朝六時出発、析木城に至り、林少佐の指揮を受けよと、これは軍司令官が明日析木城に來り、廿二日海城に來る護衛の為めなり、

此日析木城へは敵兵凡そ二千人攻め來りたり、第十九聯隊第三大隊のみなりしが、之を近づけ三百メートルより我軍射撃し敵兵三四十人と營官一名を殺せり、分捕品は四人持の銃三十七挺あり、敵は蟒洞谷に敗走せり

野津中將通報、第一軍戰鬪序列に攻城廠を加へらる
明日午後一時各宗僧侶死者の法会をなす

析木城林少佐の通報

間諜の言に、馬風屯には常將軍の部下の歩兵五百、馬隊五百あり、銃は三人持にて稀にモーゼル銃を所持す、兩三日中には必ず北方より來襲する景況あり

小女寨(析木城の北)には遼陽より新來の歩兵四百と馬隊百あり、其將(タイキフを不詳、又シヨウシヨほど老

練の聞へあり)、銃は前同様三四日中には析木城を東及北より排路屯(我兵站のある地)を北方より攻撃すと云、又隆昌州には小女寨の兵より若干分遣すと云

二十二日 (析木城林少佐の宿にて一泊す)

軍司令官は本日析木城に着せらる

明日析木城へ攻撃するは依將軍の部下千二百、騎兵百、砲四門

鈴木少佐は二中隊を率ひ、梁家堡へ着す(析木と小孤山の間析木より二千メートル)これは第七聯隊の第三大隊

小野寺少佐の一大隊は排路屯に來る

山砲一中隊(山川大尉)は析木城にあり、析木城の警備強固となる

藤田一雄(伊藤一雄中尉)は輜重兵大隊副官にて析木にあり、大塚書記も茲にあり、竹内久孝大尉もあり何れも無事なりし皆面会せり

此日大に雪ふる、騎兵斥候は連絡の為め箍家子に至る

二十三日 析木出發、海城へ歸る

待ち構へたる敵は遂に來らざりし、軍司令官は午前九時出發、海城へ來らる、護衛の前驅となりて歸る

明日騎兵の一部と歩兵小隊を以て東西柳公屯及蓋家屯附近の敵状を搜索す

析木城林少佐報告

今日蟒洞谷方向へ差遣せし斥候は午前十一時半銀洞寺に達せしも、敵を見ず、午後一時蟒洞谷に達せしも敵兵なし、二三の土人曰く、敵は昨夕より盤岑に向て退却を始め、今朝に至り全く引上げたり、其の兵力は四五千、砲二三門、又其大部分は擡槍銃を持つ如し、明早朝一中隊を盤嶺に出し、敵状を偵察せんとす

注意

第二軍兵中饅頭を食し、アヒサン中毒にて死せりと

牛莊道臺門に次の如く張札あり

日本人一人 二十円

士官 二百円

佐官 二十円

大鳥・大山・大島 一万円

海城の双龍山 二万円

を与ふるにより、尽力すべしとの意なり、

我々は二百円の価、大鳥圭介は軍人にあらず、日本にあ

りとは知らずにある

牛莊には撰標新軍千五百人程居る、指揮官は翁・聊、二人なりと

昨日電文にて知る

十七日威海衛發 艦隊司令長官の報

本日全艦隊は威海衛に至り、劉公島砲台、水雷隊營、鎮遠、濟遠、広丙、鎮辺、鎮中、鎮北、鎮南、鎮西、鎮緬、其他鎮後を請取り濟なり

鎮遠、濟遠、広丙には回航員を乗船せしむ、準備調次第一と先づ旅順港に、其他は本邦回航せしむる筈、冬所砲台及水雷營所は旅順港海兵団の兵員を以て守備し居れり砲艦一艘の武装を解き丁汝昌の柩を載せ、其他許すべき人を載せ、チーフー港へ出發せしめたり

二十四日

敵状、敵兵約一營（五百人）大馬頭より西柳公屯に入り、午後三時十分東柳公屯東北方へ敵兵の如きもの五六

名出て墓地を利用して砲兵の肩牆の如きもの三個を作る、午後二時五十分敵兵約二大隊四台子より大馬頭へ入る

左宝貴戦死に付（平壤にて）回々教徒憤惋し、日本兵を

毒害せんと計り居り、海城へも入りありと云、飲食物

愈々注意、東コヲシに此徒多し

皇后陛下の思召を以て公傷にて手足を失ひしものは人工の手足を賜はる、

本日上様よりの二月四日出書留郵便着す、筆は辰次郎へも分配せり、二月二日出の御手紙は未だ落手不仕、御

健康安心仕候

本日附を以て一等給を賜はる、乃ち本俸四十円(三十四円の所)となり、年に四百八十円となる、所得税の事は補充隊に御聞合せ下されるれば明白と存候、家宅へ渡しの金額は以前より増加し三十六円と四円の宅料を受取るべきなれど、其手続及依頼書は当地より更に送る様に可仕候

今日は腺甲山にて明日午前まで小哨となる

二十五日

廿五日午前六時蓋平発 伊瀬地第一師団参謀長より次の通報あり、

(二行不明)

一万二三千、砲二十門余を有する敵応戦し来れり、師団は充分砲撃の後、午後三時其中央に向ひ攻撃し、敵を營口方向に撃退せり、我死傷将校以下約百余、敵の死傷未だ詳ならずと、

二十四日午後十一時三十分破台子発

午前十時半頃より敵兵約三千人大富屯に入れり、又砲の如きものを見たり、

序に曰く蓋平方面の戦の時、ある一中隊は余り前進し過ぎたるために敵中に陥り一方切り抜け、ときに百余名の

死傷ありしなりと、

午後一時頃より敵の歩騎連合の敵約五百人大富屯より小富屯に入れり、同時に敵き二三十歩兵百人南に向け進みたり

明日第一師団の一聯隊山砲兵一中隊騎兵一小隊海城に来る

廿六日

愈々第一軍は明後廿八日に前進し、先づ遼陽を攻め陥し敵をして奉天府に集めしめ、其後に營口を攻め、第一師団と共に山海関の留守を衝くと云ふ説真に近し、

先づ牛莊にては一大戦闘ならん

辰次郎胃病の処、明後日は出発する都合なり、大病人と云ふにはあらず、寒き故に外出せず御安心ありたし

本日俸給受取る

名古屋市民代表者高橋頼造居れり来れり

委細は戦闘後に可申上候、先は無事まで早々以上

廿八年二月廿六日夜

於海城

金蔵

父上様

筆紙など追送品皆々着御安心被下度候

所得秋尾の事は後便可申上候、四百八十円の額なり、辰

次郎は四百〇八円来月よりは俸給五円四十銭多く御受取被下度候、なお当隊軍吏より補充隊へ通知可仕候、秋屋・飯田・前田岡本及久保□によろしく、

寒気大に減ず、但し〇度以上一二度位が平均ならん、雪ふらざるも日照るも雪とけず

三月四日発信

二月廿七日

先日來前哨として勤務多き為め軍事郵便を怠り、昨廿六日師団に依頼し漸く一封を出したり

廿六日 夜の命令

歩兵第六旅団は明日遼陽及ブライトン紫堡屯の方向に各有力なる支隊を派遣す、敵情を偵察し、成るべく正午迄に報告すべし

騎兵第三大隊は第六旅団長の令下に属す

此命令に本き第六旅団よりは一大隊を以て大富屯及

砂河園近傍にて小戦をなしたり

二月廿六日午前十一時三十分柳樹屯発、第二軍司令

官大山大将より第一軍司令官野津中将宛

当軍司令部は二十五日午後六時威海衛出帆、本日午前六時大連湾に着す、諸隊の引き上げ来る二十八日若くは三

月一日に終る筈なり、軍司令部は本日午後上陸金州に至る

二月二十六日午後六時岫巖発、奥第五師団長より

本日第五師団は牛心山を経て塘水峪より北に折れ先頭を以て興隆甸附近に前進せんとす

第五師団は二十四日紅花甸を發し三家子を占領す、其敵約二千計り、遼陽方向に退却せり、師団本隊は二十五日梁花堡子に止り、前衛は大小莫谷に止れり我軍死傷なし、敵の騎兵三、死体十三を残しあり

第一師団にては一昨二十四日の戦に凍傷患者約千人近くありたりと聞き□□秘密として聞く所によれば、去る我等が析木城へ第一軍司令官を迎へに行きし前日は野津中将と山地中将と湯池にて密会し、今後の運動に付謀議する所ありしと云、其結果として愈前面の敵を攻撃する事となりたり、乃ち本日の命令に

第二師団命令

二月二十七日午後二時三十分歡喜山に於て

一 敵は西煙台、沙河沿、大富屯、東柳公屯の線にあり、

各村端には防禦工事を施しあるもの如し

二 師団は明日沙河沿、大富屯の敵を撃攘せんとす

三 右側枝隊は午前四時前三里橋を出発し石頭山を占領

し攻撃隊の右側を掩護し、且つ遼陽街道上に歩兵一中隊を出し、特に警戒し又攻撃隊と連絡すべし

四

大島少将は歩兵第六旅団(二ヶ大隊を欠く)野戦砲兵第一大隊を率ひ、午前四時四十分其先頭を以て前哨線を出発、沙河沿及長虎台の敵を駆逐すべし

五

騎兵一中隊(一小隊を欠く)午前四時三十分西門を出発し大富屯及三台子方向の敵に対し、攻撃隊の左翼を掩護すべし、其余の諸隊は左の如く出発すべし

歩兵第六聯隊 歩兵第十八聯隊 の順序を以て午前

四時西門を出発し羅家園子をへて教軍場に向ひ行進すべし、

野戦砲兵聯隊 予備砲廠 工兵大隊 衛生隊 は前

記の順序を以て午前四時北門出発ブライトン街道を歛喜山に向ひ行進すべし、

徐家園支隊は明日午前三時三十分其陣地に就き攻撃隊の左翼背及海城を掩護すべし(当第一大隊は此任に当れり)

六

海城守備の内、第一師団の諸隊は瞭甲山より唐王山に亘る線を守備し、前面の敵兵牛莊街道を前進し來るときは之を砲撃すべし

七

攻撃隊の大行李(海城守備隊たる部隊の分を除く)

八

午前四時迄に出発の準備をなしあるべし

九

余は午前四時より歛喜山にあり

桂師団長

軍隊区分

右側支隊長

内藤少佐

歩兵第七聯隊の第一大隊

騎兵第三大隊(一中隊欠く)

山砲 一中隊

攻撃隊

歩兵第五旅団(二大隊欠く)

歩兵第六旅団(二大隊欠く)

騎兵第一中隊(一小隊欠く)

野戦砲兵第三聯隊(一中隊欠く)

工兵第三大隊

預備砲廠

衛生隊

徐家園支隊

歩兵第六聯隊の一大隊(一中隊欠く)

騎兵第一中隊の一小隊

又遠藤騎兵中尉も居る嗚呼戦争度数

方向に激しき銃声を聞く、凡そ一時半計りにして敵の段々敗走し、又大富屯より敵の来るを見る、同時に喇叭(敵の)を吹く事頻りなりし

元来支那の上官はアヘンを呑む故に午前九時以前に起きる事なし、又支那人一般日の出る前に起きる事なし、然るに朝乃ち夜の明け頃に不意を討たれし事なれば、狼狽云ん方なく、何の苦もなく僅に前衛二個大隊にて取りし、これ大島少将の隊なり、

大迫隊の先頭第六聯隊の第二大隊及第三大隊は続々前進し、遂に敵の集り居る大富屯に向て攻撃せしが、是れ又容易に奪ひたり、後文の通報に詳なり

通報

牛莊街道の敵は三台子以西に退却せり

奥宮少佐は歓喜山の前哨となる(三中隊)、此隊と第二大隊は大富屯を取りし後、午後九時帰城せり

本日の死傷、将校なし、下士以下五十余名、敵の死者道路上に二十五名を見ると、さすれば第六聯隊方面にて百名以上の死ありしならん、敵は死体を車に載せ去るも去る能はざるもの二十五名ある事なればなり、第六旅団の事は分らず、本隊の宿营地は前衛は西烟台にあり、右側支隊は二道河子にあり、左側支隊は後三里河子及五道河

子にあり、師団司令部は東河堡にあり、本日午後敵は唐王山に向て攻撃し来る、我が退路であり、又我が兵少ければ、定めて海城が一兵なしと思ひたるならん、砲兵二三発にて敵兵二三千人は敗走せり、又安存堡に來り、我大隊及团山子へ射撃せしが、丸は一つも達せず、支那兵は闇に鉄砲中々上手なりと一同に大笑せし事なり、而して遂に自ら二里計りも退却せり

此日は一日雪ふる、攻撃の為に雪中と云風さへ少々あれり

三月一日

守備隊命令の大略

明日營口及牛莊街道へ騎兵を出す

通報

本日騎兵斥候の報によれば、營口街道の上下加河・缸瓦寨と牛莊街道の二台子、大富屯には敵なし

歩兵将校斥候の報に、三台子、中央堡、小馬頭(我を去る二三里)には少数の敵停止又は行動するを見る

本日第三師団は乾線堡に至る予定なり、又軍用電信同地へ通ず、

第一師団の野砲一中隊を守備隊に加へらる

二月二十八日に捕へたる者の口供次の如し

リュイカイと云ふ者にて、二月の初兵にて(新募兵なり)左軍左營にあり、トク大人は五營(二千五百人其実は千五百人ならん)を率ひ依將軍の部下なり、依將軍は二十五營(二万二千五百人なれど其実一万内外)を率ひしが、十八營(九千人其実六七千人)に減りたり、是れは死傷によりて減ずると逃亡するものあるにあり、カンヘンガイは五百人を以て依將軍の部下にあり、カンヘンガイは凡て抬槍を用ゆ、依將軍は六十余の老人なり、糧食はシヨヲより来る兵食は月給より引き去る、依て四月の月給が二円となる、日々逃亡者多く、先日(去る)の戦(二日の事カ)三十余人を傷きたり(一營に付の事なれば総計なれば矢張り二三百人あると見ゆ)云々

二月二十七日に受取りたる書面は二月三日出、父上様より二月八日出、上村瀬平氏より(但し新聞とも)二月十六日郵船北海丸野田啓太郎より何れも拜見、上村よりは切手十枚送り来る序によるしく

三月二日

晴天なれども雪とけず、父上様二月七日の書留物及び同日附辰次郎と兩名宛手紙落手せり、御無事安心秋尾眼病如何。留守居の女は如何や、善ければよいが

敵情通報

師団は今早朝より運動を始め、前面の敵を猛撃せんとせしに、昨夜新台子北方高地にありし敵は今朝迄に悉く遼陽方面に退却したり、依て直に追躡し、午前十一時リュウセントウチと鞍山店を占領したり、敵は砂行油に退却したるもの如し

三月二日

鞍山店

桂中將

塚本大佐 宛

本日は唐王山の方向に敵兵来れりと雖、砲戦を以て退けり、而して腰屯及大小富屯には敵を見ず、堡屯、三台子には歩兵ありと、

第五師団の野砲を明日長虎台まで送る

三月三日

三台子、四台子、中央堡、大馬頭、小馬頭には敵兵あり、三台子には約二千、内騎兵五百、砲二門、四台子二千人、三台子の將は黄と李にして四台子に呉大(吳大激カ)徴あり、小馬頭に渠將一千人を率ひて居る、柳公屯には徐邦道二千人を率ひて居る。

昨日の戦に將校一名、卒二名負傷したりと(僅に二三発の砲にて)土人云へり、余は本日將校斥候として一小隊を率ひて三台子の東端まで至れり、敵は騎兵を出し、我

に向ひ又砲を射撃せり、我は一兵を損せず百發位射撃して目的を遂げて歸れり、其結果は前の如し

牛莊に出せし間諜の言

牛莊城には李大人の兵三千余あり

白家堡子(牛莊の東五里)に兵あり、其数知らず、西部

二台子(牛莊の東八里)に老湘營の兵あり、

後三台子(牛莊の東十五里)に老湘營及吳欽差の兵あり、

其数詳ならず、四台子(牛莊の東二十里)に老湘營及吳

の兵あり、東三台子(牛莊の東三十五里)又老湘營の兵

あり海城の西北大堡屯(堡屯の事ならん)は牛莊を去る

二十里、此地にも清兵あり、右白家堡子以下の兵漸々牛

莊城に向て去る、道路連絡して行く、銃を携ふるものあ

り、旗を持つあり、銃・旗を持たざるものあり、牛莊城

附近には日本人の首を持来るものには百五十両・二千

両・一万両を賞与するの告示あり(又首の相場が上り升

た)

吳大澂(吳大澂カ)の管官劉性なるものは楡樹堡に於て

戦死せり

牛莊城天主教神父叻者の車輛などを清兵奪へり

三月四日

午前十二時までは異常なし、午後前哨相当に付何か見聞

あらん

所得税の事

所得税法第三条により軍人出征中は所得税なし、故に届出を要せず、又所得税を出さず

夏服の事

補充大隊に御聞合せの上御追送下されたく、其節は夏襦袢二枚。袴下二枚。日覆一枚と夏ゾボン二着、尚御聞き合わせの上追送下されたく、夏の上衣の薄き分も御送り下されたく、

俸給の事

右は大隊より公用にて送らるる筈なり

出発

次便は定めて海城を出発し居る事と存候

紅瓦寨の戦記の新聞

昨日二月九日の新聞にて一見せり、新愛知の事は実ならず、又日本の事、ことに先鋒争ひもウソ、国民新聞と扶桑新聞は先づ可なり、されど実地とは小差多し、其他は未だ見ず

三月四日午前十一時 於満州盛京省 海城

金蔵

父上様

追て雪融けも近寄り候（雪は多くあれども）大に凌ぎ易く相成候、御地にても御清福祈り候、当地兩人其他とも無事御安心被下度候

諸家様へよろしく

郵便が又々不便となり（当地より出す事が）自然に後れ可申候

三月七日夕海城発信

三月四日

午前軍事郵便を出す、

午後前哨として徐家園へ行けば、第十二中隊長大尉石黒重熙氏は午前敵状偵察として三台子に至る、此時第三聯隊の将校斥候は四台子の入口に至らんとするとき、小馬頭より突然敵兵出でたれば、一目散に退却せしが、為めに積根藤蔵と云ふものは遂に敵に捕れたり、之を助けんと石黒大尉は戦闘せしとき、敵兵我右に出でたる為め、頭部を打たれ脳を貫きて丸は頭にありて残る、出血甚たしく同時に岡崎亀彦軍医来り治療したれど、人事不省、午後に至りて死亡したり、此戦に第十二中隊の兵卒一人は腹部打たれしが、生命はあるよし

此日は第一軍の計画は牛莊城を攻撃し取るの予定にて、本夜は軍司令部は西部二台子に止る筈なり、本日大小銃

砲の声は聞くも我が前面なる三台子・四台子には敵尚四千人あれば、軍と海城との連絡絶へ、或は回光電信又は遠く迂回して連絡を勉めたり、又本夜は是非電信を掛ける事と、糧食運搬の都合なるも、全く路絶へて進むを得ず、斥候を以て唯敵の退くを待つのみ、何となれば我が軍牛莊を取ればちようど四台子の敵は包まれる事なればなり

当夜内田中尉は補充兵を率ひて着す

歩兵第三聯隊は明朝大石橋へ帰る、

第十九聯隊の一大隊は昨日鞍山店に残りしと、

去る二十八日の戦に第十九聯隊は八十余名の死傷あり、

第十八聯隊の中尉樺山勇輔は戦死す（富永少佐は頭部をかすられしが如し）

明日第七聯隊の一大隊と砲兵二小隊は海城へ帰る

第三師団は当夜牛莊に泊す、明日は南進す、軍司令部は

西部二台子に来ると

三月五日

三月五日

敵は牛莊を取りたれば、是非退却すべき筈なるに、昨夜は我斥候へ射撃せしなれば、定めて牛莊を取られし事を知らざるものならん、若し知りて居るならば挟み討ちなりと評判せしが、果して昨夜逃げたり、今朝市川中尉は

三台子・四台子に斥候に行きしが、一人も居らず、第二中隊は偵察として行きたり、一人も居らず、次の品を分捕せり、

四台子にて 野砲三門、 彈百五十發、 小銃彈七萬發、
携帶方匙二十三、 方匙十七

十字鍬二十、 軍刀四十二、 旗八つ、 竿二十、
太鼓四、号衣(兵の服)四十

毛皮四十、牛莊近傍の図二枚、精米三十石、荷車
一、馬三、

その他は目下集取中にて多くあり

三台子にて 砲二門、旗二、太鼓一、砲彈三十七、火藥

六箱、小銃彈三千、
毛衣四、ジナミット五袋

思ふに、敵は牛莊を取られ、狼狽して走りし如く見受けたり、又書類の如き雑品は山の如し、

午前八時次の報あり

軍は予定の如く本日牛莊を攻撃せり、第三師団は西北面第五師団は東南面に向ひ、敵を包圍しつつ、午前十時頃戦闘を開始し、正午頃には各師団とも牛莊に進入せり、敵の一部は營口方向に退却し、其大部は牛莊市街の家屋に拠り、頑固に抵抗をなしたるより、激烈なる市街戦と

なり、我兵は各家屋毎に逐次に之を攻撃し、午後十一時頃に至り約ね片付、我軍大勝利に帰したり

敵死者詳ならざれども六百を下らず(其実千四五百人と聞けり)、降伏人九百人(後で五百人だけ捕虜となす)分捕品大砲十六、其他馬匹糧秣、銃等は今調べ中、我兵死傷二百六名

三月四日

野津中将

此報に就て聞く所によれば、股を貫く佐藤大佐(第十八聯隊長)は負傷(軽)、今田少佐(第二十二聯隊長)は戦死、新大尉(第十八の第八中隊長)は即死、其他將校の死傷割合多しと、

三月四日の夜は牛莊城の外にて戦闘前哨にて一夜を明せしと、殊にジナミットを以て敵の居る家屋を倒せし事多しと(其音は聞けり)

考ふるに、平壤・旅順以来の大戦なりしならん、併し劇戦(全部)は少時間少人員ならん、敵の退路なき為め、必死となりものなり、敵は二十營ありしと云(一万人より六千人の間)去る二十七日以来の敵の死傷は二千人以上上の由に聞く、我軍は四五百人の間にあり、師団は本日藍旗溝附近にあり、明日は營口方向に進む

辰次郎来る、病気はカイチウ、今は全く快癒なり、追送

品は皆来れりと申したり、上月の分も、上月は無事

三月六日

本日は日直となる

本日軍は高刊近傍にあり、營口へは第一師団は明朝攻撃するならん、宋慶・呉大徵（呉大激力）は愈如何するや
当隊は今三日間の後は大連湾へ至り上船して山海関の近傍に上陸すとの説あり、如何にや

本日午後捕虜及傷者と分捕品少々着す、捕虜は夕刻まで続々来る、凡そ千人もあり、死者は千四五百人が実説なり、捕虜は多く上海及湖南省の兵にて、呉大徵の部下にて内哨官（百人長とも云）五六人を見受けたり、兵に十五六才より五十才位の者と交り交りなり、大抵平壤の捕虜と同じ、

牛莊は囲みたる事なれば、敵は必死となり、昼は已むを得ず、臼砲を打込み、夜は附近の村々に居りて出る兵をば射撃せり、されば一度に五十人も百人も逃亡せしなれど、夜の事なれば十分に射撃は中らざりし、

牛莊は城郭なく、唯兵營は数ヶ所にあり、市街の周囲は土塼を廻しあれば、凡て城の如くなり居れり

牛莊には米千石麦六百石ありと、唯今分明せり

本日午後三時頃高刊、營口方向に砲声を聞く、定めて明

日は本攻撃の日なれば、又々逃げ支度なるか

内田中尉に面会せり、父上様の事を聞けり、毎度手紙を見せて貰ひしと

捕虜兵は大抵黒布を以て頭を纏ふ、日本軍の取扱は丁寧にして驚くの外なし

捕虜の言に營官（五百人長）等は多く戦死せりと

頭髮を互に結び合せすつなぎにて引き行くに中にはしをれるものあり、又内には平氣の者あり、我は海城西門にて監視せしに、余が巻煙草を吹くを見て行きながら呉れと云ふものあり、又火を貸し呉れと云ふものあり、清兵のすずしきには驚き入りたり

石黒大尉の遺骨は明日午後一時蕎麦山に葬る、

第五師団の將校中三名の負傷者は本日海城に来る名知らず

海城に於ける朝鮮人

虎の威を假る狐かなとは、朝鮮人の事なり、大国サラミとて朝鮮内地にて大に恐れ居る者が、日本軍の人夫となり清国に来るや、日本人気取りとなり、清国人に向て大威張りなり、現に我見る所にも半は朝鮮、半は日本、半は支那語を用ひ、清商の品（まんぢうの類）を買ふに、若しまければ善し、まけぬときは頭を張る等の事をなす、

又長キセルは用ひず、短くし我人夫の如く支那服を上に着けたるもの多し

朝鮮人は白色の服を着す、又くつは朝鮮のわらぢを用ゆ、中には我防寒外套を着し、支那人の靴を着するものあり、但し、頭はきらず、帽は用ひず白はちまきをなす、中々忍耐強し

日本人はよほよほと呼びて全く弄人形の如くに云ふ、此等朝鮮人は二三百人も来り居れり

捕虜の景況

唯今まで取調べたる捕虜は合計六百二十七人にして、内には文官あり武官あり、従僕あり兵卒あり、大抵湖南兵でしめ、三日前に牛莊に着したるものなりと云、年齢は十一才の小供より六十才位のものあり、重傷者あり、軽傷者あり、又立派な男もあり、全く一定せず

将校及同相当官は之を別室にし、待遇を厚くする事及一般に日本に送りて事定るの後に帰国せしめんと云ひ諭したるより、哨官(百人長)は位二品以下五品までのもの十二人、文官は甘肅知県候補生衡承恩(七品)を始め十七人を調べ出せり、何分恐れ居るを以て、調べれば今一人は出でるならん、

日本兵は氣の毒に思ひたるにや、中には煙草を与ふるも

のあり、水を与ふるあり、又夜間は明開きの家にて土間なればキビガラ又は火をたき煖め、さするものあり、本日は牛莊街道は雪とけたれば、一面に川の如く泥田の如くなれば絹布や毛皮を持ち居るもの一様に泥だらけなれば、夜間の寒さに耐へざるを以てなり

捕虜の中には鍋を持参するもの、米を持つもの、錢二三文も持つもの、水煙草・鴉片を持つもの、換えぐつを持つもの、各人各別に何か持ち居れり、然るに文官にては七品以上、武官にては五品以上の者は従者二三人も携へ居るに、此度は同じく捕虜となり、物品一つも持たず、従者には離れ何卒わらじ一足を下さいと手を合せて祈る様は氣の毒にも思はれし、況んや牛莊にての降兵は多く新着にて来たと云ふ計り、一度も戦はざるもの多しと云、此等の兵は五營にして約二千人位なりしと云へり

捕虜兵の武官は申分なき、土百姓の顔と骨組をなせり、文官は文官らしく、矢張り顔色も白く優しき所あり、何れも文章習字は可なり

弾丸を受け治療を受くるもの、本夜のみにて二十七名、何れも重傷にて生命六けしきもの多くありし、

私は今より当さに日本民たるべしと述べ、此処より日本へ何里と問ふ、或人答て曰く、一万里と、捕虜等曰く

(哨官又は文官らしき者) 我家にあるとき、他出するには必ず車馬を用ゆ、何卒願くば、車を給せよと、或人曰く、我等朝鮮を経て来る、一万五千里、汝等に車馬を給する能はず、然れども營口又は大連湾より舟に乗る事なれば、汝等は我より遙かに上等なり、又日本は何れに至るも皆汽車あり、故に一百里は一時間にて行くを得ると、彼等曰く、何分御助け願ひますと、三拜九拝せり、昨日以来一食もせざる捕虜あり、曰く、水を与へよと、依て雪を取りて与ふ、彼大に喜ぶ、後に塩と飯とを与ふ、彼等大に喜て食ふ、曰く、日本に行きても此くの如きかと、曰く、日本に行けば格別にな等なる事は万国人皆知る、当地は一物なし、与ふるに由なしと、彼等泣きて喜ぶ、嗚呼錢貫けの兵なれば捕虜となる身の上こそ実に氣の毒の念を起さしむ、呉大徵(吳大澂)・劉盛休は逃げ大将なり、早く潔よく丁汝昌の如く自殺して多兵を助けよ

本日明日とも当隊は捕虜取締の掛なり、

三月七日

今朝より雨ふりしが、又雪となり、折角とけたる雪は又銀世界となりたり、去り乍ら雪あるときは道は氷なれば外行するには泥ならずして結構結構、雪は午後三時に至

りて凡そ五寸積もれり、水溜りの所なし、されど一般に暖氣にして風あれども耳を切るが如くならず

昨日海城に帰りし、ヘイガクカイと云ふ間諜は兼て營口の西洋人の所に遣せしものなるが、一昨五日起身營口より帰る途中で見し事次の如し、

一營口の清兵は漸々田庄台へ退却せりと、

一營口の西洋人の許に二三日前太平山の戦に負傷せし哨官十二人、兵卒五百名を托し治療中なりと

これは第一師団の去月二十四日の戦に就てなり

一、我が日本軍は高刊まで進みたりと

本日營口遼陽街道へ騎兵を出す

石黒大尉は愈本日命となれり、白骨は蕎麦山に葬られたり、涙の種なる供物はひもの一枚、するめ二枚、酒一合、まんぢうは將校に分配

海城の東を流るる海城川(砂河とも云ひ、遼川とも云)

の橋は今日水塊の爲めに落ち工兵にて修理中なり、故に此橋の通ぜざる限りは糧食も何も一つも当地に来る能はず、又析木城の北を流るる川も同じ、氣候暖なるに従ひ道路は皆川となり、畑は皆泥田の如く、河川は橋の外通られず、橋粗悪なれば運搬上の困難言ん方なし、此等の事は先便に一寸申したれば、詳しく申さず、雪融けに近

付たれば御推察下されたし

近日中今日は格別の寒さなり、されど先づ日本の冬位なれば〇度以下の事はなし、大抵二三度より二十三四度に至る、夜間はしかし寒し

第七聯隊の第二大隊、第十九聯隊の第三大隊は当地に帰り居れり

本日は第一・第二軍を以て営口を取りし筈なり、未だ報告なけれど、取る事間違なければ戦況は後報に譲り、先は右迄申上候、尚二三日の中には多分当地引上げ大連湾へ還り(当地は第五師団留守番)それより山海関と天津の間に上陸するならん、今日より十四五日の後にありと思はる(但し軍機上の事なれば真偽は知らず、下馬評定なり)愈相分り候はば又々可申上候、謹言

三月七日午後四時 満州盛京省海城に於 金蔵
父上 様

追て、日本は最早梅又は櫻の頃と存候、当地は木の葉も出ず、兩三日(今日は雪なれど)前には家屋の雪が融け候位に候

諸家様へ宜敷御願申上候、別段手紙不差上候

(未完)